

さて、山口の奇談は更につづく。「彼は日本中を高足駄にあの一高の夏帽を被って、到る処徒歩旅行をしたのである。彼の足跡は遠く北海道の果から、西は九州の山奥にまで及んでいた。足駄がけ、雑のうを肩に、一個の夏帽と一個の杖をもつて行雲流水の旅に飄然と出た彼の姿は、実に一高の代表型であった。行く処野に宿り、山に臥し、或いは断崖の上に大空を仰いで寮歌を高唱し、または大河の畔り、月見草吹く芝浜に水の面を眺めつつ、健児の詩を微吟したりなどして、浪々、日本国中を彼は跋渉した」。その後、ある夏の夕、近くに住む級友和辻哲郎(哲字を)を訪ねる道すがら彼は松籟に波靜かな須磨の風光に迷ぞ魅せられて、しばし仮寝に及んだばかりに、土地の巡査に咎められるが、天下に知られる独眼龍と判明し、危うく事なきを得た挿話も交えて、「転寝すらも雅び男の」と題して後段を結んでいるのである。遂、最近になって、私は同窓会発行の「創立七十年記念誌」に接する機会があり、その中で、岩崎賢太郎氏(中学「一回」の「寄宿舎の思出二・三」を拝見して、山口独眼龍の徒歩旅行が単に「一高魂物語」だけでなく、実に川中寄宿舎においても実証され、且、愛する寄宿舎の小さき友達にも影響を与えていたのだと思ひ返して、年甲斐もなく熱き胸の感激を覚えたのである。因に、岩崎氏の思い出の一部を引用させていた。こう、「山口氏は吉見(小見野村が正確)の出身、左眼失明の独眼で、一方で修養の男と言われ、冬の最中でも修養のためだと云って単衣物一枚で通したり、一日二十里も平気で歩いて

無銭旅行したりしたが、事實は一高を一度でパスした秀才で然も努力力行身を持つ事極めて厳しい当時の模範生であった。……「今旅行から帰る途中だ」と云いながら、洋服に義笠脚絆草履姿でよく寄宿舎に立ち寄って舎生を集めて話をした。旅行談の中にいろいろ修養の話を含めて一席打ったあとで、(略)若い舎生は一モ二モなく感心してしまつて、次の休暇には誰も彼れも草履脚絆姿で其処らの山を歩き廻つて、独眼龍気分を味わつたものである。ところで山口独眼龍が寄宿舎に来たあととは舎生が瀕に生き生きとなつて、山口さんの残した一高の寮歌を大唱したり、「ア大敬失敬」という癖を真似て連発したものである」と。高魂物語では独眼龍將軍の終りに、彼が、恩師塩谷青山先生と共に大陸に渡つては、清末辛亥革命に参画して、若き革命の壯士たちと肝胆相照し、歌つては舞い、舞つては吟じて彼らを鼓舞激励するさまが画かれ、「げに男子の意気の花」と結んでいる。誠に明治の初雁健児、氣宇大にして、意氣壯なり、と称すべきであつたらう。

さて、岡田は明治四十(一九〇七)年、一高文科を卒業して帝大哲学科に進み、終始教育界を歩んだことは周知のとおりである。山口は明治四十三年(一九一〇)年、一高独法科を卒えて帝大法律科に進み、大正三(一九一四)年卒業して朝鮮總督府に入る。恰も第一次世界大戦の勃発した年である。ドイツ租借の青島陥落後の大正六年、青島守備軍政府に転じ、同八(一九一九)年これを辞して帰国し、弁護士を開業して、大正十三年(一九二四)年五月、第十五回衆議院総選挙に埼玉三区(比企、大井)より立候補し、苦戦を強いられながら、見事当選を果すのである。山口の政界転進の前後、日本の内外情勢は一つの転換期を迎えていた。即ち、外では第一次世界大戦の勃発、つづくロシア革命とシベリア出兵、ヴェルサイユ条約と国際連盟の成立、ワシントン会議等が相次ぎ、内では大隈内閣の「対中国二十一ヶ条要求」、米騒動や小作争議の頻発、関東大震災後の金融恐慌、吉野作造(東大教授)らに代表される「大正デモクラシー」運動等に際会して、国民の思想と生活は動揺していたのであつて、当時の青年たちもこれらの傾向に少なからず影響されたのである。若くして「独眼龍將軍の徒歩旅行」で世間に知られ、応援団をリードし、後輩たちを集めては人生を語るを良しとした山口が、いま、政治家生活への転進の緒口で、更めて青年たちとの接触を求めたのも無理もない。即ち、彼は先の衆議院議員に当選の後、代議士、弁護士的身分でありながら、大正十四(一九二五)年六月、母校である第一高等学校寄宿舎生徒監に就任している。当時を記する『向陵誌』(昭和五年発行、非売品)の文言を借りれば、「然りと雖も新任の山口政二生徒監又豪快氣鋭にして、誠意を以て向陵健児の薫陶に盡力せらるべきを思へば、吾人又歡喜を禁じ得ざるものあり(六月十二日、全寮晚餐会、生徒監歓迎の記)と。そして、この記録を裏付けるものごとく、「一高百年記念・向陵」(昭和四九年、非売品)では、「山口政二氏は本職は弁護士で、先輩であつたが、世上独眼龍として知られ、その名の通り

片眼をキラリ、キラリと光らせて居られた。」と述べられている。しかも、山口は僅々三ヶ月で生徒監交替となるが、私が驚いたことに、当「向陵誌」は右に次いで同年十月二日、第三学期全寮晚餐会の記事の中で、「山口政二生徒監を送りて岡田恒輔新生徒監を迎ふ。山口前生徒監は其の就任三箇月の短期に過ぎざりしも、而かも我が自治寮に遺されたる功績は甚大にして、今後も種々の本校機関に關係援助せらるべく、(略)岡田新生徒監亦前生徒監と同一中学校の出身にして温厚篤実、其の自治寮に尽して吾等を思ふ事敢て前生徒監に異ならず。」と記しているではないか。敗戦の一高の寄宿舎に埃まみれて放置してあつた二千頁に及ぶ「向陵誌」、しかも「昭和五年九月発行代表者岡田恒輔」と巻末にあるばかりに、書庫に埋もれていたこの膨大な「向陵誌」を更めて播いたのはそう古い事ではなく、実に私の定年後のことである。岡田と山口(独眼龍)が実に同一中学(川中)、しかも戦前期の思想問題が漸く激しさを加へ、学校教育の困難さがいや増そうという時代に、一高寄宿舎の生徒監(主事)としてわが川中の両先輩が正に相前後して任に当られたとは、何という驚きであり、奇縁であり、又誇りであつたらうか。殊に、山口が川中出身であつたことは、亡父から戦前その名を聞いて以来、この時まで確かめ得なかつた。旧い川高同窓会名簿にも當つたがよく分からずじまいだつた。

さて、岡田は昭和七(一九三二)年五月まで生徒主事を勤めるが、この期間は「治安維持法」の施行、世界不況の発生、満州及び上海事變の勃発等政治経済情勢は混迷を加え、学生の思想傾向や生活状態に種々の問題が発生したことは周知の通りであるが、殊に、一高の教育制度は授業による「教室教育」とは別に、いわゆる「寄宿舎制度」(全学年による寄宿舎制の全人教育)であり、しかも、開校以来、「自治」の伝統を堅持していたから、歴代生徒主事(監)の責務も又並々ならぬものがあつた。資性、温厚篤実であつた岡田は、山口に次いで、この困難な時代にさまざまな寮生の要求や不満、殊に「北の方赤光る星見ずやわが友」と寮歌に歌つた当時の思想問題には心底痛めつつ対応したといわれる。

一方、生徒監を辞した山口は、以後惜しくもその死去に至るまで短期間であつたが、政治活動に専心するのである。前記のとおり、大正十三(一九二四)年に政界に出た時期は、今日のように、いわゆる「短命内閣」がつづき、翌十四年には初の「普通選挙法」や「治安維持法」が成立する一方で第一次大戦後の不況に加えて関東大震災後の金融不安、恐慌が発生し、日本共産党(一九二四)等社会主義政党も生まれるという次第で明治維新以来正に半世紀を経て、日本の政治・社会も一つの転換期を迎えつつあつた。人材のうえでも維新の元勳たちは大方死去し、新しい人材に乏しかったことも今日と極めて類似する時代であつた。日本中を徒歩旅行して社会の表裏の琴線に触れ、中国辛亥革命にも参画した山口は、正にこのような時代に初の川中出身の代議士となつた。されば山口の政界進出の動機は、「対中国二十一ヶ条要求」に代表される日本の大陸強行政策に